
ザ・対決

夢野ユーマ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ザ・対決

【Nコード】

N3557P

【作者名】

夢野ユーマ

【あらすじ】

もしあのライヴァルがまだ生きていたら？

（前書き）

ジョゼフ・L・マンキーウィッツの思い出に捧げる。

「混迷を深める2011年の日本！振り返って朝まで生TV、今日はビッグ放談です！二人のノーベル賞作家に現代社会をめった切りにしてもらいます！！」

ピカッと灯りがついた。そこにいたのは――

太宰治101歳と三島由紀夫85歳だった。実は二人とも若くして自殺しているので、見逃しがちだが、実は今生きていてもおかしくない年である。そしてこの小説世界の中では二人は自殺に失敗して生きていた。

そして、この二人の哲人がライヴァルとして競いあっていることで、このパレルワールドの日本は現実の日本よりずっと文化水準・教育水準が高かった。

「生まれてきてすみません」

太宰のつかみにスタジオも茶の間も大爆笑する。太宰も満足そうだった。101歳のジイちゃんと言えば、苦悩のセリフもギャグになる。

「それにしても民主党の政権はお粗末だったね」

意外にも太宰は保守派の知識人、三島は進歩派の知識人として出演していた。

考えてみると、太宰の家は貴族院議員だった。そして太宰の娘の夫は自民党巨大派閥・津島派の会長である。（本当です。Wikipediaなどで調べて下さい。）太宰は戦後、一種のフィクサーになって、隠然たる力を持っていた。

もともと太宰は死ぬ気などなかった。

愛人と散歩している時、誤って川に落ちただけであった。そこに若い巡査が自転車で通り、一命を取り止めた。そう考えると「人間失格」が遺作でなく、「グッドバイ」という未完の作品があることも、遺書的作品「如是我聞」の結末が「これからも書くつもり」と終わっていることも納得出来る。

一方、三島。三島の家も貴族で、樺太を領地としていたため、敗戦により領地を失った。そのため、先帝陛下（昭和天皇）や保守政権に反感を持った。そして、政権批判発言をくり返した。理念というより、金や権力の問題だった。

クーデターを起こそうとしたが、機動隊が来るのが早く、切腹できなかった。

二人とも本当の歴史上も仲が悪かったが、パラレルワールドでも対立していた。しかし、二人には共通点多かった。まず、本質的に頭がよかったので、TVの時代が来ることを理解し、出演も辞さなかった。

またTV向けのメロドラマのシナリオなども旺盛に書いた。

特に三島は角川春樹と意気投合し、角川書店のメディアミックス戦略に大いに貢献。マスコミに対して大きい発言力を手に入れた。

そして、どっちもどっちでありながら、互いの文学を邪道とのしりあっていた。(・|・;))

菅政権を激しく批判する太宰に三島も昂って反論していた。田原総一郎が三島をけしかける。

太宰のテーブルには寺山修司、高橋克彦など東北を拠点にする幻想作家と、丸川珠代が座っていた。

三島のテーブルには大島渚、久世光彦、若松孝二らが座っていた。

(くそっ！中上くんがいないのが痛いな！)

中上健次は故郷・和歌山の熊野を舞台に最先端の社会と、神話・古典の世界が重ね合わされるイメージを描き、ノーベル賞を受けた。しかし、現実世界と同じく1992年に癌のため亡くなっていた。三島は後継者がいなくなることに目くらむような絶望をおぼえた。

逆に太宰エコールには寺山修司が健在だった。

現実世界では自殺未遂をくり返し、病気になるって死んでいった寺山修司だったが、この世界では太宰がパトロンになり、元気に国際的に活躍していた。

両陣営が一段落したところで、美輪明宏が座興として「ヨイトマケの歌」を歌っていた。

茨城県の老人ホームの二人部屋では二人の老人がＴＶを見ていた。石原慎太郎と大江健三郎という老人である。

「美輪明宏って本当にキレイだなあ。この世の者と思えぬ」

「バケモノだよ」

「ああ、一度でいいから、あんな華やかにＴＶに出てみたいなあ」

大江は石原の顔を見た。ユージローというブサイクな弟がいて、時々、年金をかすめに来るのである。石原の息子たちは全然面会にも来なかった。

「太宰や三島のような大御所がいなかったら俺たちだって芥川賞とって金持ちになれたかも知れないのにねえ」

大江は力なく笑った。そんな夢物語を信じるには大江は年老い過ぎていた。金があつたら東京都知事選挙に出るなどと話す石原はボケているんじゃないかと大江は思った。

また東京の場末のラーメン屋には二人の初老の男がいた。村上龍、村上春樹。中小企業で毎日会計事務をしている定年近い二人だった。浮気したいという欲望をマラソンやサッカーで紛らわしていた。

「いいぞ！三島！もっとつつこめ！」

「何言つてんだよ！あいつにだまされて政権交代して俺たちは地獄にいるんだよ」

「あいつらＴＶでは批判しあつても、終わったら笑いながら高い

酒やごちそうを楽しむんだろ。いいなあ」

「何言つてんだよ！お前の書いた小説見せてもらったけど、ひどいもんだったぞ。ほとんどの日本人は読んでないからってフィッツジェラルドやトルーマン・カポーティやJ・D・サリンジャー、オーウェル、ハックスリから堂々と盗みやがって」

「バレたか！（ハハ）次はエルロイかピンチヨンから盗もうと思っ
ていたんだ」

「文学の世界では三島や太宰のような本物の天才しか輝くことは出来ねえんだよ。俺たちのような偽物はダメなんだよ」

「お前が書いてるのはロリコンのポルノだもんな」

龍と春樹からは哀愁が漂っていた。二人はさみしそうに笑った。

スタジオでは米倉涼子というコンパニオンが飲み物やおしぼりを配っていた。この世界には松本清張ドラマはなかった。人格低俗下劣な松本清張は太宰にも三島にも否定され、自殺していた。

「朝まで生TV」の通例で、最後はグダグダになって、終わっている。
く。

もう一人の生きているノーベル賞作家中井英夫はパチッとTVを消した。「今年はパツとしませんね」20世紀最大最高の傑作「虚無への供物」を書いた中井もTVに目をつけた。もともと美しい少年が大好きだった中井は趣味と商売の両方をかねて、美少年タレント

の事務所を作り、角川書店ばりのメディアミックス戦略を行った。それはキモいオタクの男の子、女の子に大ウケし、中井は巨万の富を築いた。

「ユーマ、お昼ぐらいまで休みます」

「ハイ、お薬とウイスキーを入れたお紅茶をお持ちしました」

中井は毛皮のガウンを脱いだ。夢野ユーマという秘書が紅茶を持ってくる。

ユーマはキャーソンの天野に似た昭和顔の少年だった。中井は若い時だったら、こんなブサイクは使わなかっただろう。しかし、ユーマは妙に文学に詳しく、重宝していたのである。中井は西島隆弘という魅力的な美少年の待つ寝室に消えていった。

ユーマは毛皮のガウンをそつと羽織ると鏡の前に立った。その唇には笑みが浮かび、瞳には不思議な光が宿った。(ー+、)ニヤリ

(f i n)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3557p/>

ザ・対決

2011年10月7日15時20分発行